View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

# ルター伝と宗教改革史叙述における「95 か条の論題」（1517 年 10 月 31 日）についての一考察

## ――20 世紀以降のドイツにおける議論を中心に――

小田部　進 一

## Ⅰ．はじめに

2017 年は宗教改革 500 年を記念する行事が世界各地で、また日本の各地で行われた。この 500 年記念は、従来の 100 年祭と大きく異なる特徴を持っていたことが観察される。例えば、世界大戦後のはじめての 100 年祭、グローバルに祝われるはじめての 100 年祭、そしてエキュメニカルに祝われるはじめての 100 年祭など。そのような中で、1517 年 10 月 31 日に、マルティン・ルターがヴィッテンベルクの城教会の扉に「95 か条の論題」をハンマーで釘づけし、貼りだしたという、特にドイツのルター派の福音主義教会を中心にではあるが、世界の宗教改革の伝統に立つ教会の教派的自己理解に大きな影響を与えてきた英雄的ルター像が、史実としてはもはや支持され得ない神話的なルター像であることが明らかになってはじめての 100 年祭であることが、本稿のテーマに関係している。本稿では、特に 20 世紀から 21 世紀にかけて、ルター及び宗教改革史研究における「95 か条の論題」をめぐる動向を概観し、500 年前の出来事が学問的な歴史叙述の中でどのように想起されてきたのか、また想起されているのか検証する。とはいえ、膨大なルター研究の動向すべてを網羅する作業は、本稿の制約を越えるため、ここでは、より包括的な検証を行っていくために必要となる具体的な問題点や論点を確認するために、代表的な例に対象を限定する。本論では、まず、20 世紀のルター伝からいくつか伝統的な叙述を紹介する。続いて、神話的ルター像に対する 1960 年代の批判を取り上げ、最後に、21 世紀の新しいルター伝や宗教改革史叙述に注目し、その特徴を考察する。これらの作業を通して、宗教改革 500 年の原点となる 1517 年 10 月 31 日をめぐる歴史叙述の多様性と現在に至る議論の諸側面を明らかにし、新しい 100 年をスタートする研究の方向性を展望したい。

## II．本論

### 1　20 世紀のルター伝における「95 か条の論題」の叙述

#### 1.1　ハインリヒ・ベーマーのルター伝（1925 年）

20 世紀初頭にマールブルク大学やライプチッヒ大学で教鞭を執っていたルター派の歴史神学者ハインリヒ・ベーマー（1869–1927）は、宗教改革 400 年から 8 年後の 1925 年に『若きルター』を出版した[1]。彼は、ルターによる「95 か条の論題」の掲示をとてもドラマチックに描写している。

> こうしてルターが 1517 年 10 月 31 日、諸聖徒日の前日の午後 12 時前に、彼の助手アグリコラと呼ばれたアイスレーベン出身のヨハネス・シュナイダーだけを連れて、黒修道院から約 15 分離れた城教会に向かい、北側の入り口の扉に 95 か条の論題のはり紙を打ちつけたとき、ヴィッテンベルクの誰も、ルターが何をたくらんでいたのか知らなかった[2]。

ベーマーのルター伝は、20 世紀後半に疑問視されることになるアグリコラに帰せられる目撃証言のメモの誤訳に基づいている。しかもその証言には書かれていない論題が貼りだされた日付、時刻、そして場所がベーマーの叙述には付加されている[3]。その行動が密かに行われたという描写は、歴史的文脈からルターの行為を切り離す仕方で、宗教改革のはじまりとなるこの日の出来事に対するルターの存在を際立たせている。論題を貼りだす行為を表現するドイツ語には、「打ちつける」「掲示する」を意味する „anschlagen“ が使用されている。ハンマー（金槌）の存在については明確に言及されていないとしても、この単語は、読者にルターがハンマーで論題を掲示している情景を想い起こさせるものである。宗教改革 400 年直後のルター伝の中に、一人の修道士が、ローマの教会にハンマーをふりかざし、宗教改革のはじまりを告げる伝統的・神話的ルター像の典型の一つを見ることができる。

#### 1.2　ローランド・ベイントンのルター伝（1950 年）

次に、日本語に翻訳され、国内でも知名度の高い古典的ルター伝の一つ、アメリカの教会史家ローランド・ベイントン（1894–1984）によるルター伝『我ここに立つ』（1950

1　Heinrich Boemer, Der junge Luther, Stuttgart 1951.
2　Heinrich Boemer, op.cit., S.156.（下線部は本稿執筆者による）
3　アグリコラに帰せられる証言とその誤訳の問題については、Erwin Iserloh, Luthers Thesenanschlag. Tatsache oder Legende?,（Vorgetragen 1961 in der Universität Mainz）, http://www.unifr.ch/iso/assets/files/Iserloh/4.pdf（2017/05/27/ アクセス）, S.6 を参照。

年）の描写を見てみたい。ベイントンは、1517 年の出来事を次のように描いている。

> フリードリヒ賢明侯が彼の免罪符を販布する諸聖徒日の前夜ふたたびルターは語った。こんどは文字に書いて語ったのであって、広く行われていた習慣に従い、城教会の扉に、討論のための 95 箇条の提題からなるラテン文の、印刷したはり札を、掲示したのである[4]。

ベイントンは、ルターが印刷した「95 か条の論題」を城教会の扉に「掲示した」、原文の英語では、“posting... on the door” と記述している。この英語の表現からだけでは、必ずしもハンマーによって貼りだしたのかどうかは分からない。訳者は、「掲示した」と翻訳している。挿絵としてクラナッハによる「ヴィッテンベルク城教会」の木版画が付されているだけであるが、「95 か条の論題」を掲示するルターの姿を描いた絵を一度でも見たことがある読者ならば、当然、ハンマーを持って論題を扉に打ちつける姿を想像したことであろう。「釘で打ちつける」は英語で “nailing...on the door” であるが、ベイントン自身は、そのような単語は用いていない。彼は、扉への掲示（“posting...on the door”）が「広く行われていた慣習」に従った行為であったことを指摘している。討論のための論題掲示に関する大学の規則は、後に見るように、21 世紀の議論においても、「95 か条の論題」が実際に掲示されたことを推測させる重要な根拠である。

### 1.3　ゲルハルト・リッターのルター伝（1962 年）

ベイントンのルター伝から 12 年後の 1962 年に、ルター派牧師の息子で、フライブルク大学の歴史学教授ゲルハルト・リッター（1888–1967）がドイツ語でルターについての小著を出版した。リッターは、告白教会に属し、ボンフェッファーなどの反ナチ運動の指導者たちとも親交を持ち、強制収容所に入れられる経験もした人物であり、ミュンヘンの反ナチグループ白バラにも影響を与えた人物である。リッターは、1517 年のあの日を次のように描写している。

> 1517 年 10 月 31 日にルターが彼の有名な 95 か条の論題を打ちつけた扉のある、その城教会で、聖遺骨の 17443 の小片や類似のものが展示された。敬虔な選帝侯フリードリヒのお気に入りの（すぐれて利息を生み出す）収集物であった。すべての陳列品の前に祈りながら跪き、城教会の建築のためにいくらかの寄進を行う者は、その度ごとに煉獄における 12 万 7 千 799 年と 116

4　ローランド・ベイントン、青山一浪・岸千年訳『我ここに立つ』聖文舎、1954 年、80 頁。（下線部は本稿執筆者による）

日の贖宥を獲得すると、宮廷でルターの代理人となっていたシュパラティンは、なお1518年に喜びほくそ笑みながら計算していた[5]。

リッターは、「95か条の論題」が掲示された城教会に注目している。城教会には、選帝侯フリードリヒの自慢の聖遺物が収蔵されていた。つまり、ヴィッテンベルクの中で、ルターの論題が問題視する贖宥と結びつく聖遺物崇敬が実践されていた中心的な場所に、ルターが「95か条の論題」という楔を打ち込んだことが強調されている。リッターもまた、ドイツ語の „anschlagen“ を使用している。

### 1.4　リヒャルト・フリーデンタールのルター伝（1967年）

しかし、1960年代も後半になると、やや描写の仕方に変化が起こる。ドイツの作家でイギリスに移民したリヒャルト・フリーデンタール（1896–1979）は、ベイントンやリッターから少し後の1967年に出版したルターの伝記の中で、1960年代に生じた論争に言及しつつ、伝統的な語りを紹介する仕方で1517年の出来事を記している。

1517年にルターは、彼の修道院独房の無時間性から時代の中へ、そしてこの世へと踏み出した。伝統的な形式によれば、10月31日、午後12時頃、ルターは、ヴィッテンベルク城教会の扉に贖宥についての95か条の論題を打ちつけた。近年、この日付が正しいのか、あるいはルターが果たして論題を打ちつけたのか、論争されている。彼の打ちつけたのが手書きのビラだったのか、印刷されたものか確かではなく、両方とも大学の掲示板として使われていた扉への掲示として一般的であった[6]。

「伝統的な形式」として、先に見たベーマーのルター伝における叙述と同じ内容が紹介されている。しかし、同時に、それが史実であるかどうかの論争にも言及されている。その上で、次のようにも述べている。

次のことだけは確かである。世界中が訴え、世界中がこの論題を読むか、聞くかした。ルターが鳴り響くハンマーによる打撃によって彼の抵抗［Protest］を教会の扉に釘づけにしたということが、もしかしたら違っているとしても、それは既存の教会に対して行われたものすごい打撃であった。プロテスタント教会は、ヴィッテンベルクの扉への掲示を自分たちの創立の日として祝っ

5　Gerhard Ritter, Luther: Gestalt und Tat, Gütersloh 1962, S.56.（下線部は本稿執筆者による）
6　Richard Friedenthal, Luther: Sein Leben und seine Zeit, München 1967, S.155.（下線部は本稿執筆者による）

ている[7]。

「もしかしたら違っているとしても」というとき、フリーデンタールは、蓋然性の高さを表すドイツ語 „wahrscheinlich“ ではなく、むしろそれが低い判断を表現するドイツ語 „vielleicht“ を使用している。つまり、「ハンマーによる掲示」の可能性を真っ向から否定するのではなく、そのような伝統的ルター像を受け容れる余地を残しつつ、しかし、文字通りの「ハンマーによる打撃（Hammerschlägen）」から論題がもたらした本質的な「ものすごい打撃（ein furchtbarer Schlag）」に読者の目を向けさせている。こうして、フリーデンタールのルター伝には、「95 か条の論題」の叙述が伝統的な形式から新しい批判的なものへと変化する移行期的な性格を読み取ることができる。また、フリーデンタールは、この日ルターが、「修道院独房の無時間性から時代の中へ、そしてこの世へと踏み出した」と説明している。しかし、ルターは常に時代の歴史的文脈の中で生きていたし、その中で確かに次第により大きな公の場で知られ、またそのような公に訴える人物となっていった。フリーデンタール自身、先に引用した導入の後、ルターの論題を歴史的な文脈の中で解説することを試みている。しかし、その解説は、個々の論題からは導き出せないルターの勇気と確信に満ちた感情、しかも、それはドイツ史上、稀に見る、あるいは他に例を見ないものであるという、ドイツ的英雄としてのルター像に収斂されていく[8]。フリーデンタールがハンマーによる論題掲示のイメージから十分に距離を取れていない理由が、ここにあるのかもしれない。

## 2　ハンマーなしの宗教改革者

### 2.1　エルヴィン・イーゼルローの講演（1961 年）

フリーデンタールがルター伝を出版する 6 年前の 1961 年に、トリア大学で教鞭を執っていたローマ・カトリック教会の教会史家エルヴィン・イーゼルロー（1915–1996）が、グーテンベルクの活版印刷術が発明された地域として有名なマインツの大学で、「ルターの［95 か条の］論題の掲示。事実なのか伝説なのか ?」という講演を行った[9]。結論は、事実ではなく伝説であるというものだった。つまり、従来の宗教改革史叙述で当然のように記述され、視覚的にも描かれてきた 10 月 31 日の出来事は、史実ではないという主張である。これが一大センセーションと論争を巻き起こすことになっ

7　Friedenthal, ibid.（下線部は本稿執筆者による）
8　Vgl., Friedenthal, op.cit., S.175.
9　Vgl., Erwin Iserloh, op.cit.. 同時に、Volker Leppin and Thimothy J. Wengert, Sources for and against the Posting of the Ninety-Five Theses, in: Lutheran Quartery, Volum XXIX（2015）, S.373–398, http://www.lutheranquarterly.com/uploads/7/4/0/1/7401289/lq-95theses-leppin_wengert.pdf（2017/6/9 アクセス）も参照した。

た[10]。

イーゼルローは、ルター自身の言葉にも、ベーマーが前提にしているアグリコラをはじめとする同時代人の証言にも、論題掲示に関する信憑性のある証言が一切ないことを指摘した。修道院に入った日のことや、いわゆる「塔の体験」と呼ばれる宗教改革的認識への転回について回想し、言葉を残しているルターが、宗教改革記念の中心とされてきた10月31日の論題掲示について何も語っていない。確かに、ルターより14歳年下のフィリップ・メランヒトン（1497–1560）が、1517年から約30年後の1546年に次のような証言を残している。

> ルターは、正しい信仰のための熱心さに燃え、この版［ルター全集］の第1巻に印刷された贖宥論題を出版しました。これを、彼は公にヴィッテンベルク城教のそばにある教会に、1517年の諸聖徒日の前日に打ちつけて貼りだしたのです[11]。

イーゼルローは、1517年の当時、メランヒトンはまだチュービンゲンにいたことを指摘する。つまり、メランヒトンも直接の目撃者ではない。そして、出所は分からないが、彼が聞き知っていた1517年のルター伝説についての情報を、ルターが亡くなった後に書き記したと思われる。歴史的に確実なことは、ルターが、贖宥販売について監督責任を持つマインツの大司教であり、選帝侯であったアルブレヒト・フォン・ブランデンブルク（1490–1545）に、1517年10月31日付で「95か条の論題」を添えた手紙を送ったということである。この手紙は、アルブレヒトの役人によって同年11月17日に開封され、12月13日以前にアシャッフェンブルクに滞在していた大司教の手に渡った。ちなみに、ルターの手紙への返事は送られてこなかった。イーゼルローの主張に対して、ドイツのルター派神学者クルト・アーラント（1915–1994）は、論題掲示の史実性を主張した。しかし、イーゼルローは、ルターがアルブレヒト大司教宛の手紙の中で論題掲示について言及しておらず、ルターが手紙の返事が来るのを待たず、しかも即刻に問題を公にするようなことはしないのではないかと反論している。

さらに、イーゼルローが指摘する他の二つの点がある。一つは、ルターと同時代人でヴィッテンベルクの後にニュルンベルクで活動したクリストフ・ショイル（1481–1542）が、1528年に、「ルターは、贖宥に関する95論題を作成し、他の教師たちに送っ

10　ドイツの雑誌『シュピーゲル』が1966年にこの論争を取り上げ、「ルターの論題：ハンマーなしの宗教改革者」というタイトルで記事を書いている。シュピーゲルの記事については、次のURLで見ることができる。http://magazin.spiegel.de/EpubDelivery/spiegel/pdf/46265199（2017/05/27アクセス）。

11　Philippi Melanchtonis Opera quae supersunt omnia, hg. Carl Gottlieb Bretschneider/Heinrich Ernst Bindseil, Halle/Braunschweig 1834–1860ff, Bd. 6［= CR 6］, 161f.

たが、それらがさらに広められることを意図はしていなかった」と述べていること[12]。そして、もう一つは、ヴィッテンベルク大学規則によれば、当時、確かに論題が掲示されることは普通のことであるが、その場合でも、すべての教会と大学の扉に掲示されることが一般的であり、さらに言えば、大学教授自身によってではなく、大学の用務員によって貼りだされるのが普通であったということ[13]。つまり、ルターが「95 か条の論題」を城教会の扉に打ちつけるようなことはなかったし、ルターは「意図することなく宗教改革者になった」というのが、イーゼルローの結論であった[14]。

ちなみに、2003 年にイギリスの俳優ジョセフ・ファインズの主演で公開された「ルター」という映画がある。イーゼルローの講演から 40 年以上が経っているにもかかわらず、この映画の中で、ルターは、一人で猛然と城教会の北側の扉に歩み進み、手に持った「95 か条の論題」を左手に、右手でハンマーを持ち、釘を打って掲示する修道士として登場する。明らかに従来のルター伝説を無批判に映像化しており、神話的イメージをルターから切り離すことの難しさを示している[15]。

### 2.2　ゲオルク・レーラーの書き込みへの注目（2006 年）

21 世紀に入って、ルターの論題掲示がもう一度再燃する出来事があった。ルターの同僚ゲオルク・レーラー（1492–1557）が、ハンス・ルフトの工房から 1540 に出版されたドイツ語訳新約聖書の最後のページに書き記した、おそらく 1544 年のものと推測される書き込みが注目されたからである。そこには、「主の年 1517 年の諸聖徒日の前日に、マルティン・ルター博士によって贖宥についての論題がヴィッテンベルクの諸教会の扉［複数形］に掲示された」と書かれていた[16]。このメモ書きの内容は、当時のヴィッテンベルク大学の規則が、討論のための論題の掲示をヴィッテンベルクのすべての教会を対象にしていた内容に対応している。

しかし、現在、チュービンゲン大学神学部で教鞭を執るルター研究者のフォルカー・レッピン（1966–）は、レーラーのメモによる証言も、その 2 年後のメランヒトンの証言と同様、ますますルターの影響の想起に人々が献身する時代に由来するもので、ヴィッテンベルクでどのようにルターの想起の行為が起こっていったのかを示すものとして興味深くはあるが、1517 年の出来事の歴史的再構成のための新しい証言ではないと判断している。レッピンは、ルターの証言に基づいて、アルブレヒト大司教に個

12　Erwin Iserloh, op.cit.,［62］.
13　Erwin Iserloh, op.cit.,［60–61］.
14　Erwin Iserloh, op.cit.,［64］.
15　この映画には、他にも、ルターによって創りあげられた非歴史的な、暴力的なカールシュタット像など、20 世紀後半の学問的歴史研究に基づかない描写が多く見られる。
16　ゲオルク・レーラーの書き込みについては、次の URL を参照：http://projekte.thulb.uni-jena.de/index.php?id=105（2017/05/28 アクセス）。

人的に手紙を送る行為とヴィッテンベルクの諸教会の扉に論題を公にするという行為は相容れないという、イーゼルローが 1960 年代に示した解釈を踏襲している[17]。

## 3　21 世紀における「95 か条の論題」の叙述

イーゼルローの講演以降、20 世紀の間にも、良質のルター伝が書かれている。例えば、マルティン・ブレヒトの 3 巻からなる包括的なルター伝[18]、ラインハルト・シュバルツによるコンパクトではあるが質の高いルター伝などが挙げられるであろう[19]。これらのルター伝は、ルターと彼の宗教改革を学ぶ上で今日でも基本的な文献であり、すでによく知られているものである。そこで、本稿では 21 世紀になってドイツで出版され、注目されているルター伝や宗教改革史叙述を取り上げることにより、最も新しい動向を確認することに専念する。本稿が注目するのは、二人の教会史家フォルカー・レッピンとトーマス・カウフマン（1962-）による著作である[20]。

### 3.1　フォルカー・レッピンの『マルティン・ルター』（2006 年）

レッピンは、2006 年に 11 章からなる『マルティン・ルター』を出版している。第 4 章「宗教改革者」の中の第 1 節「宗教改革的突破 ?」の後に、第 2 節「ルダーがルターになる－論題の公表」で「95 か条の論題」が取り上げられている。以下、レッピンがルターを「ルダー」と表記している叙述に関する部分については、本稿でも「ルダー」を使用する。

> 1517 年 10 月 31 日をルター自身が、回想の中で、絶えず彼の宗教改革的登場の出発点として理解していた。この日、彼は、――これだけは確証されているのであるが――、贖宥に関する 95 の論題をマクデブルクとマインツの大司教であり、ハルバーシュタットにも監督責任を持つ、アルブレヒト・フォン・ブランデンブルクとヴィッテンベルクに責任を持つ司教のヒエロニムス・シュルツ（没 1522）に送付した。これにより、彼自らがその影響にかなり驚いたジャーナリズム的地震を引き起こした[21]。

---

17　Vgl., ibid.

18　Martin Brecht, Martin Luther, Bd.1-3, Stuttgart 1981-1987.

19　Reinhard Schwarz, Luther, Göttingen 1986.

20　この他に新しいルター伝として、西洋史家の Heinz Schilling による Martin Luther. Rebel in einer Zeit des Umbruchs, 3.Aufl., München 2014（1. Aufl., 2012）があるが、二人の神学者によるものに限定する。3 人のルター伝に対する最新の書評については、Marcel Nieden, Ausgewählte Luther-Biographien（Bücherschau）, in: Pastral-Theologie: 2017 – Jubel und Trubel im Namen der Reformation!?, 105. Jahrgang, 2016/1, Januar, S.97-102 を参照。

21　Volker Leppin, Martin Luther, 2. Aufl., Darmstadt 2010（1. Aufl. 2006）, S.117.

レッピンの叙述の中に「95 か条の論題」のハンマーによる掲示は一言も現われない。手紙による教会責任者への送付のみが史実として確実なことであり、しかし、それが甚大な影響を及ぼした原因であることが述べられている。しかし、レッピンは、手紙の送付という形式にだけでなく、論題それ自体が持つ爆発力について、続けて説明している。

> 彼の論題の本来の爆発力［Sprengkraft］は、まさに、彼の神秘主義に根差し、後期中世の敬虔神学［Frömmigkeitstheologie］を通して受容した悔い改めの理解を、後期中世的敬虔の最も重要な確かさを与える形式としての贖宥に対する批判のために、全力で用いたことに基づいている[22]。

神秘主義的「根」を持つ中世的ルター像が、レッピンの「95 か条の論題」の叙述、あるいは彼のルター像の根本を規定している。宗教改革的転回について言えば、1513 年から 1520 年までの期間に暫時的な仕方で、後期中世的な修道士から宗教改革者への変化を遂げたのであって、ある特定の時期の宗教改革的突破を前提に 1517 年の論題を解釈することはできないという立場である[23]。具体的には、ルダーがすでに 1513 年にシュタウピッツを通して「キリストのみ」を志向し、1516/1517 年には教父アウグスティヌスの講読を通して「恵みのみ」を強調し、「聖書のみ」の原理も次第に明確になる中、1518 年のハイデルベルク討論において「信仰のみ」の理解に関する重要な発展が見られるという。レッピンによれば、これらの宗教改革的神学の特質が明瞭な仕方で公の場に示されたのが 1520 年の宗教改革的文書であり、この神学が社会を改革する指針となったときに世界史的な意味における宗教改革と呼ばれる出来事が起こったのである。

これらの枠組みの中で、ルターの「95 か条の論題」が解説されている。悔い改めが全生涯に関わるという理解も（第 1 論題）、さらにはそこから結論するサクラメントとしての悔い改めの相対化も（第 2 論題）、いずれも後期中世の神秘主義に基づくものである[24]。第 56 論題以降で、ルターが罪や功績の計量化を支える「教会の宝」を問題にするとき、レッピンは、これらもまた、神秘主義と敬虔神学を通して獲得したキリストの恵みの確信に基づく批判として説明している。第 58 論題で、ルターがキリストの働きの直接性について述べ、第 62 論題で「教会の真の宝は…福音である」と述べている箇所でも、義認神学の影響の可能性については一切触れられていない。

---

22　Leppin, op.cit., S.118.
23　Leppin, op.cit., S.116f.
24　Leppin, op.cit., S.121. ただし、新しい点として、綱領的先鋭化と教会批判の文脈に言及されている。

論題の爆発力を神秘主義に見るレッピンではあるが、ルターの論題の影響を決定的に促進した「より表面的な理由」として、第81論題から第89論題までに述べられた潜在的教皇批判にも注目している。これらの論題には、なお教皇の教会の忠実な一員であり、後の展開が未知なる状況の中で、後のルターには稀な繊細な仕方での語りが見られるという。すなわち、信徒の代弁者という語り方である。しかし、レッピンは、そこに同時に福音主義教会の「ひとつのはじまり」を見ている。

> こうして、しかし、これらの批判点がまずもってそこに立てられ、そしてある仕方でこれにより事実上、教皇の支配からの福音主義教会の分離を導くことになる一つのはじまりが据えられた[25]。

「95か条の論題」を解説した後、レッピンは、二つの事柄を取り上げている。一つは、ルダーからルターへの名前の変更という伝記的背景、もう一つは、ルターのハンマーによる論題掲示の有無をめぐるイーゼルロー以来の議論である。ルターの名前の変化は、彼が「95か条の論題」がもたらす「節目」をどの程度自覚していたのか、という問いとの関連で取り上げられている。ルターは、1517年11月11日付の手紙に、「自由（人）」を意味するギリシア語の「エレウテリウス」（Eleutherius）を用いた署名をしている。当時の人文主義者たちが、名前をギリシア風に表記していた慣習に倣ったものである。その署名には、「修道士マルティヌス、自由人、しかもなおまったくの僕、そして捕らわれ人」と記されている。ルターは、このギリシア語風表記から、「d」に変えて「th」を用い、名前を „Luder“ から „Luther“ へと変更した。この署名が最初に登場するのが、「95か条の論題」を添えてマインツ大司教アルブレヒト宛に書かれた手紙である。レッピンは、ルターの名前の変更に観察される自由を、「神秘主義とアウグスティヌス主義に基づく暫時的な神学的発展に従った」二つの行動による既存の規範に対する対抗に関連づけて説明している。二つの行動とは、1517年9月のスコラ神学を反駁する論題と同年10月の神秘主義的悔い改め理解に基づく贖宥制度に対する「95か条の論題」の公表のことである。この二つの行動にレッピンは、スコラ的教育の規範から自由になり、すでに神秘主義の著作に見られた「キリストの直接的な近さ」にすべてを関連づけることができるようになったルターを見ている[26]。これらの諸洞察に基づき、ルターは、司教に対して神学的な教説に関する事柄を訴えるほどの覚悟ができていたと説明されている[27]。

---

25　Leppin, op.cit., S.124. しかし、当時は教皇制を否定するつもりが全くなかったルターの言動に、そのような後の「分離のはじまり」を果たしてみることができるのか疑問である。

26　Leppin, ibid.

27　Leppin, op.cit., S.124f.

ルターが論題をハンマーで掲示したかどうかについての議論もまた、論題公表に対するルター自身の姿勢と自覚についての問いに関わっている。レッピンは、ここで、上述したイーゼルローから三つの論拠を紹介している。第一に、ルター及び同時代の証言がないこと。第二に、大司教から期待された反応があるまでは、論題を城教会の扉に掲示するといった示威的な行為は控えるに違いないということ。第三に、16 世紀の大学における掲示は、一般的に、規則に従い、大学の用務員が行っていた業務であり、その場合、10 月 31 日当日に掲示される可能性がないこと。

イーゼルローの論証を紹介した後、レッピン自身、プロテスタント的伝統がこれまで祝ってきたような、一人の修道士が 1517 年の諸聖徒の日の前日、10 月 31 日に、群衆をかき分け、城教会の扉にハンマーをふりかざし、「95 か条の論題」を示威的な仕方で掲示したという出来事は起こらなかったと指摘する。そして、最後に次のような言葉で彼の叙述を結んでいる。

> むしろ、ルターの宗教改革は、とても慎重に始められた。そして、自由にされた人、エレウテリウスさえもが、自分が手紙の送付によって始めたことすべてに対して驚くことになるのであった[28]。

レッピンは、「手紙の送付によって始めたこと」を、2016 年に新しく出版した 7 章からなるルター伝『見知らぬ宗教改革：ルターの神秘主義的根底』でより強調している。つまり、第 3 章「改革から教会批判へ」の最初に「95 か条の論題」について扱っているが、最初の節の見出しは、「1517 年のヴィッテンベルク：論題打ちつけ［Thesenanschlag］ではなく手紙」となっている[29]。オスナブリュック大学の歴史神学者マルティン・H・ユング教授（1956–）は、レッピンの著作に関する 2017 年の書評で、そのルター像がエキュメニカルな動機からではなく、彼の神学的中世研究に由来するものであるが、まさに宗教改革 500 年の年に非常に活発になったエキュメニカルな交流に新しい学問的基盤を提供するものとなっていると指摘している[30]。しかし、同時に、ルターの論争的な言葉、1517 年以降の公の場への登場、1525 年から死ぬまでの生活スタイル、二種陪餐、司祭の結婚、少女のための学校、そして牧師の選任といった改革の提案、セクシャリティに関する考え、さらには聖書の革命的な使用など、神秘主義のみによって説明できないことが多々あるという批判も述べている。ユング自身は、

---

28　Leppin, op.cit., S.126.

29　Volker Leppin, Die fremde Reformation: Luthers Mystische Wurzeln, München 2016, S.65.

30　Martin H. Jung, Volker Leppin: Die fremde Reformation, in: Sehepunkte: Rezensionsjournal für die Geschichtswissenschaften, Ausgabe 17（2017）, Nr.10: http://www.sehepunkte.de/2017/10/30073.html（2017/12/26 アクセス）

10 月 31 日が「中世内の出来事」だったとは考えていない。

> 私と多くの者は、それをそうは思っていない。イメージに留まるために言うならば、マルティン・ルターという木は「神秘主義的根［Wurzeln］」を持つかもしれないが、レッピンが示す事実は否定されない仕方で、しかし、ルターの幹と枝は、神秘主義と中世を越えて成長し、他の木々と共に、さらにまさに新しい時代と呼ばれる新しい風景を作り出したのである[31]。

レッピンの 2006 年のルター伝における「95 か条の論題」の叙述に戻って指摘をするならば、例えば、第 62 論題の解説に関連して、レッピンはルターの後期中世的な要素を一貫して優先するあまり、彼自身がプロセスとして捉えることを支持している形成途上にある義認神学の表現を読み取る可能性を必要以上に排除してしまっていないか疑問に思われる。そこに、後に観察するカウフマンの解釈との違いが見られる。

### 3.2　トーマス・カウフマンの『マルティン・ルター』（2006 年）

レッピンのルター伝と同じ年に出版されたカウフマンのコンパクトなルター伝の中で、1517 年秋の贖宥と悔い改めをめぐる論争は、一方で、ルターの義認神学の発展の重要な契機として、他方で、「異端への道」の発端となる出来事として取り上げられている[32]。カウフマンは、しかし、「神の義の聖書解釈者」（6 節）から、間髪おかずに 1517 年の贖宥に関わる論題の公表にはじまる、教皇教会「からの」破門と教皇教会「の」破門に至る「異端への道」（8 節）の叙述に取りかかってはいない[33]。そうではなく、第 7 節「預言者と宗教改革者として」を差し込むことにより、ルターの宗教改革的な影響の実相が、包括的に理解される必要があると主張している。

> ヴィッテンベルクから来た修道士であり神学教授であるルターによる比類なき影響は、いくつかの要因の構造的相互作用からしか説明がつかない。それらの要因のうち、どれかひとつだけでも不可能であり、それらの相互影響の

31　Martin H. Jung, ibid.

32　トーマス・カウフマン、宮谷尚美訳『ルター－異端から改革者へ』教文館、2010 年。Thomas Kaufmann, Martin Luther, 5. Aufl., München 2017（1. Aufl., 2006）.

33　カウフマン、前掲書、74 頁。翻訳では、ルターが教会法を焼いた行為について書かれた箇所が、「極度にとてつもない、大胆にして素朴、かつ挑発的で真剣な彼の行為は確かに、キリスト教信仰の確実性の名のもとにある教皇教会による破門となった。西方教会の歴史において、この 1520 年 12 月 10 日は『コペルニクス的転回』を示している」と訳されている。しかし、ドイツ語の原文では、„die Exkommunikation der Papstkirche im Namen der christlichen Glaubensgewissheit“ であり、カウフマンは、ルターが教会法を焼く行為を「教皇教会を」破門する行為と解釈し、その歴史的意義を「コペルニクス的転回」と呼んでいるため、誤訳である。

みが宗教改革という「事件」の本質をなしている[34]。

このように歴史的事象を様々な文脈から総合的に理解することを試みるところにカウフマンの歴史叙述の特徴がある。カウフマンの「95 か条の論題」についての総合的な叙述については、後の別の著作に見るとして、ここでは、まず、2006 年のルター伝の中における論題掲示を確認する。

> 95 箇条の提題［中略］によって展開した贖宥に対する根本的抗議を、ルターがあらかじめ知らせてあったのは、幾人かの親しい同僚、そしてブランデンブルク選帝侯家出身のマクデブルクの大司教やヴィッテンベルクを担当している教会の上長者であるブランデンブルク司教だった。大学の掲示板としての機能も果たしていた城教会の扉に 1517 年 10 月 31 日に掲示したことによって、おそらくヴィッテンベルクの知識人たちにもルターはこの抗議のことを知らせたのだろう[35]。

カウフマンは手紙による送付に加え、城教会の扉への掲示についても肯定的な叙述をしている。ただし、城教会の掲示についてそれ以上触れられてはいない。むしろ、ルターによって贖宥批判の中心的内容が書かれた 7 頁にすぎないドイツ語の著作が 1518 年に出版され、この小冊子が、1519 年末までに 22 の様々な版によって発行されたことが注目されている。なぜなら、このドイツ語の著作こそが、「ラテン語による提題が及ぼした効果を何倍も上回った」と考えられているからである[36]。こうして「ほぼ一夜にして、ルターの名前は学者たちや識字知識を持った人々の間で有名になった」とカウフマンは指摘している[37]。

### 3.3　トーマス・カウフマンの『宗教改革のはじまり』（2012 年）

カウフマンは、2006 年のルター伝の後、2009 年にルターを中心に据えながらも宗教改革の出来事をより包括的に描いた著作『宗教改革の歴史』を出版している[38]。さらに、2012 年に『宗教改革のはじまり』と題する著作を公にし、その中で、文字通り「はじまり」を問いの中心に、さらにより総合的に「95 か条の論題」を解説することを試

34　カウフマン、前掲書、59-60 頁。
35　カウフマン、前掲書、69 頁。
36　同上。
37　同上。
38　Thomas Kaufmann, Geschichte der Reformation, Frankfurt am Main 2009.

みている[39]。これらの著作は、2006 年のルター伝の中で主張していた立場を継続的に徹底させた成果と見なすことができる。特に本稿が注目するのは、2012 年の 16 章からなる著作の第 6 章「はじまりのシナリオ――歴史的関連性に見るルターの『95 か条の論題』」である[40]。18 頁に亘って 1517 年 10 月 31 日に公表された「95 か条論題」の多様な歴史的文脈とその相互作用に関する総合的な解明が試みられている。カウフマンは、そのような考察こそが、特別な期待と批判が向けられるこの「記念の日付」に相応しいと考えている[41]。考察は、想起文化史的文脈、贖宥制度史的文脈、領邦史的文脈、メディア史的文脈、伝記的文脈という五つの視点から行われている。

第一の視点である想起文化史的文脈との関連で、カウフマンは、教派間の対立という文脈の中で祝われた 1617 年の宗教改革 100 年記念に注目する。なぜなら、その時に、1517 年の「論題掲示」の出来事が想起文化の結晶点となり、「ハンマーによる打撃［Hammerschläge］」はいまや権力を持った反ローマ的宣戦布告として理解された」からである[42]。このような論題掲示理解が 18 世紀にルター派の教会の中に定着していった。そして、次のようにコメントしている。

> ヴィッテンベルクの托鉢修道士がこの文書によって彼の愛したローマの教皇の教会を助けようとしたことは、非常に稀にしか、あるいは全くもって視野に入れられることはなく、それは、主に自分たちのアイデンティティの表明へと固定化された教派的文化におおよそ相応しいものではなかったのであろう[43]。

カウフマンは、このような教派的な想起の文化に、「95 か条の論題」の歴史的理解が妨げられてきた原因を見ている。特に、福音主義キリスト教のアイデンティティの核に関わる「95 か条の論題」をめぐって、教会の公的自意識と学問的宗教改革史研究の間にずれがあることが指摘されている。

続いて、第二の視点である贖宥制度史的な文脈から「中世後期の贖宥の歴史からすれば、ルターによる 95 か条の論題は、それ以前から生じていた贖宥批判の頂点であり、終結点であった」ことが示されている[44]。「95 か条の論題」の第 81 条から第 89 条に贖宥に対する信徒たちの問いや批判が吸い上げられていることは、ルターが「大衆的な

39 Thomas Kaufmann, Der Anfang der Reformation: Studien zur Kontextualität der Theologie, Publizistik und Inszenierung Luthers und der reformatorischen Bewegung, Tübingen 2012.
40 Kaufmann, op.cit., S.166−184.
41 Kaufmann, op.cit., S.166.
42 Kaufmann, op.cit., S.167.
43 Kaufmann, op.cit., S.168.
44 Kaufmann, op.cit., S.174.

贖宥批判の広範囲に亘る雰囲気を前提とし、彼自身の贖宥との取り組みの中で消化していた」ことを記録しているという[45]。そこからカウフマンは、「ルターが目の当たりにし、それを引き合いに出した贖宥に反対する雰囲気は、ルターの贖宥批判の成功にとって一つの決定的な前提となっていた」ことを指摘する[46]。カウフマンは、宗教改革前夜の贖宥状販売、特にその危機的な状況について、具体的なデータに基づいて例証している。例えば、シュパイヤーにおける 1517 年の贖宥状販売の収入は、1502 年の 15 分の 1 にまで減少しているし、フランクフルトでは、同じく 1517 年の収入が 1488 年の約 7 分の 1 に減少している。贖宥状販売キャンペーンにかかる経費を考えるならば、費用対効果も疑わしい状況である[47]。領主だけでなく、民衆もローマに贖宥による寄付をする気を持たなくなっている状況が観察される。1517 年の直前に、贖宥に対する「無関心、嫌気、あからさまな敵意」が非常に際立っており、贖宥制度史的にルターの論題が「贖宥批判の頂点であり、終結点」という性格を持っていることが明らかにされている[48]。

第三の視点は、領邦史的文脈である。ルターが活動していたヴィッテンベルクはザクセン選帝侯の支配地域である。そして、その領土内では、ローマの聖ペトロ大聖堂建築のための贖宥状を販売することは許可されていなかった。カウフマンは、そこに、複数の大司教区を獲得するための資金集めに贖宥状を販売するマインツとマクデブルクの大司教アルブレヒトに対する政治的な競争、自分の領土内の財政流出を好まない「領邦君主による一般的な財政的保護主義」、さらには、選帝侯領内で、特にヴィッテンベルクで、贖宥をもたらすかなりの恩寵を獲得することができたといった事情があったと指摘する[49]。カウフマンは、ルターと選帝侯の間には、贖宥批判をめぐって一致と不一致が存在していたと指摘する。両者は、一方で選帝侯領からの財政流出を防ぐという点で一致している。これは、しかし、ヴィッテンベルクの城教会に集められた聖遺物の魅力の喪失を招く可能性があるのではあるが。他方で、ルターは、選帝侯が贖宥批判をよく思っていないことを知っていたであろう。そして、選帝侯がルターの贖宥批判をどのように受け止めるのか不明であった。そのような状況の中で、学問的な形式による「対話的・暫定的」な性格を与えてはいるが、選帝侯の宮廷との関係に捕らわれず「95 か条の論題」を公にしたルターの独立した態度が浮き上がってくる。

---

45　Kaufmann, op.cit., S.170.
46　Kaufmann, ibid.
47　Vgl., Kaufmann, op.cit., S.170f.
48　「95 か条の論題」がもたらした教会政治的な展開は、ルターの想定を超えるところであったが、贖宥批判に対する同時代の反響は、ルターが前提としていた状況から、全く「予期せぬ」ものであったのではないであろうことが推測される。したがって、「95 か条の論題」がルターの予期しなかった反響を呼びおこした、という一般的な描写は、より多面的に叙述されることが求められていると言えよう。
49　Vgl., Kaufmann, op.cit., S.175.

第四の視点は、メディア史的文脈である。カウフマンは、ルター自身が「95か条の論題」の掲示に言及していないのは、その行為が、当時の大学規則とその日常的な実践に基づけば、センセーショナルな性格をもたない、ごく一般的な行為であった（normalia non in actis）からであり、当時の慣習に基づけば当然掲示されたと考えるのが自然であると主張する[50]。また、95か条からなる論題を何部も手書きして手紙に添えて送ったとは思えないので、史料として残ってはいないものの、おそらく1枚刷りに印刷して掲示したに違いないと推測している[51]。注目に価することは、カウフマンがルターの論題の公表を、同じ1517年の4月26日にルターの同僚であるアンドレアス・ボーデンシュタイン・フォン・カールシュタット（1486-1541）が151からなる論題を掲示していたことに比較して検討していることである[52]。これは、ルターの影響を受けてアウグスティヌスの恩寵神学を支持する立場に転向したカールシュタットが、スコラ神学に対して主張した論題である。さらに興味深いことは、4月26日という日付が、10月31日と同様に、ヴィッテンベルク城教会で贖宥の効果を持つ聖遺物が公開される日の前日であったということである。つまり、カールシュタットも、そして彼の論題掲示から少なからぬ影響を受けたであろうルターも、聖遺物が公開されるため、ヴィッテンベルクに多くの訪問者が想定される「より広い公開性」の場を意識して論題を掲示していた可能性があるということである。そのような共通点とは別に、両者の相違点も明示されている。

> ルターとカールシュタットの行動の間にあるメディア戦術もしくはジャーナリズム戦術の決定的な相違は、もちろん、ルターが、管轄する教会の指導的機関に彼の論題を送付し、そうして、この文書の歴史的に最も重要な影響を誘発したという点にある。すなわち、アルブレヒト大司教を媒介としてのローマによる審問のはじまりである[53]。

また、カウフマンは、ルターが「95か条の論題」をアルブレヒト大司教に向けて送った行為の中に、「彼が、しかし、贖宥の事柄についてもはや何も議論の余地がないことを誤解なく明らかにした」とういルターの断固たる態度を読み取っている[54]。学問的な形式による「対話的・暫定的」な性格を持つ論題に、もう一つ別の性格が加わっている。そして、カウフマンは、ローマによる異端審問という反応が、手紙におけるル

50　Vgl., Kaufmann, op.cit., S.177.
51　Vgl., Kaufmann, ibid.
52　Vgl., Kaufmann, op.cit., S.178-180.
53　Vgl., Kaufmann, op.cit., S.179.
54　Vgl., Kaufmann, ibid.

ターのこの断固たる態度に対応していることを指摘する。カウフマンによれば、重要な問題は、論題のハンマーによる掲示の有無ではなく、論題の公開性とその戦術の特質、そして、そこから読み取れるルターの事柄に対する態度の特徴を明らかにすることにある。

最後に、第五の視点として、伝記的文脈が注目される。カウフマンは、以上に考察された諸々の文脈を背景として、1517 年 10 月 31 日がどの程度ルターの生涯における転回点であるかが理解できると考えている。カウフマンは、ルター自身が、後年に、この日に彼が立たされていた立場の行動論理から「一歩を踏み出した」ことを自覚的に回想していることに注目している[55]。そして、「その一歩」とは、印刷された論題と手紙というメディアの結合によって、一方で神学教授として、他方で司祭としての行動論理であったことが指摘されている。これらのメディアの結合により、「ルターが、初めから教会的ヒエラルキーに、行動することへの圧力を生み出し、それが予測不能な発展へのさらなる推進力を解放することができた」と述べている[56]。

このように「95 か条の論題」の公表のメディア的特徴とその行為を規定した行動論理、及びそれが内包する潜在的な爆発力について述べた後、カウフマンは、特定の日付がルターの生涯の転回に深く関わっていることを示すために、この時期のルターの自己認識と神学的文脈に注目している。ルターの名前の変化については、レッピンのルター伝の中ですでに説明したので、詳細は省く。レッピンの場合、ルターの自由の認識は神秘主義におけるキリストの直接的な近さの洞察に結びつけられていた。カウフマンは、神秘主義については一切触れてはいない。彼の関心は、ルターの行動の心理的側面から 10 月 31 日のルターにとっての自由の経験を明らかにすることに向けられている。カウフマンは、以下に述べる観察に基づき、ルターの名前の変化を、彼自身によって創作され、感得された伝記的「転回」と呼んでいる。

> 10 月 31 日に踏み出したその＜一歩＞をルターが迷いを振り切って決心しなければならなかったということが事実であるならば、ついに彼がそれを決心したとき、あるいは、彼自身が理解しているように、それによって自由にされた者として勇敢に、そして彼の職業的良心に基づき行動することができたところの、神からかの内的自由が贈られたとき、それを限りなく大きな自由あるいは安堵として感得したということもまた説得力を持つことである[57]。

55　Vgl., Kaufmann, op.cit., S.180. 注 60 に典拠が示されている。WA54, S.180,12−21; 185,5−8; WATR 4, Nr.4707 (16.7.1539), S.440, 18f.
56　Vgl., Kaufmann, op.cit., S.180−181.
57　Kaufmann, op.cit., S.181.

次に、ルターの神学的文脈である。ルターは、「95か条の論題」の約2ヶ月前の9月4日に「スコラ神学反駁」という97か条からなる論題を公表している。カウフマンは、それまでの聖書講義で「神の義の解釈者」として神学的に成熟してきたルターによる、時間的に近い二つの論題に内的に密接な関係を「同じメダルの二つの側面」と見なしている[58]。二つの論題とも綱領的性格を持ち、公を志向している点で共通している。さらに、一方は学問的権威に対して、他方は教会的権威に対する権威批判的衝撃を持っている。こうして、前者は、行為義認という神学的立場に対する批判、後者は、その功績主義的理解に基礎づけられた実践に対する批判という密接な関連の中で理解されることになる。つまり、二つのいずれかのみを取り出し、その優位な意義を強調しても、この時期のルターの神学思想とそれに基づく行為の総体、さらには「宗教改革のはじまり」を理解したことにはならないということである。カウフマンは、二つの論題の伝記的関連性に注目し、伝記的・神学的文脈の全体の中で、「95か条の論題」の神学的内容も理解されると考えている。

以上のことを踏まえた上で、カウフマンは「95か条の論題」の神学的内容の説明に入る。その際、「95か条の論題の中に、ルターが1513年から1516年の間に形成した彼の神学の中心的概念のいくつかを探しても見つからない」ことを指摘する[59]。例えば、信仰、義認、救いへと導く罪のゆるしといった概念のことである。カウフマンは、その理由は、論題の中心テーマが贖宥であり、悔い改めという「水平的な次元」の実践を場としているからであって、ルターに義認神学的本質が欠けていたからではないと考えている[60]。その根拠として、第36論題「真実に痛悔したキリスト者ならだれでも、贖宥の文書なしでおのがものと定められている、罰と罪責からの完全赦免をもっている」と第37論題「真実のキリスト者ならだれでも、生きている者も死んでいる者も、贖宥の文書なしで神から彼に与えられた、キリストと教会とのすべての宝にあずかっている」という二つの論題が注目されている[61]。なぜなら、これらの論題において、「垂直的な」意味の次元を前提とした「恩寵の受容における人間の完全な受動性」が暗示されており、その限りにおいて正確に行為義認的共働理解に反対するものとなっているからである[62]。特に、「教会の真の宝は、神の栄光と恵みとのもっとも聖なる福音である」と神の言葉の優位性を主張する第62論題に「垂直的な神学的基盤」が一瞬現われており、その土台の上でルターが、水平的な次元の悔い改めに関わる神学的帰結

58　Kaufmann, op.cit., S.182.
59　Kaufmann, op.cit., S.183.
60　カウフマンは、その際、Berndt Hammが悔い改めが「水平的な次元」の問題であることを指摘していることを参照している。Vgl., Kaufmann, op.cit., S.183, Anm.72.
61　『ルター著作選集』教文館、2012年、14頁。
62　Kaufmann, op.cit., S.183−184.

をもたらしていることが指摘されている[63]。これらの考察から、カウフマンは次の結論を導き出す。

> 95 か条の論題は、贖宥のテーマに先鋭化されたルター的義認教説のある特殊な適用形態を示しているが、義認教説それ自体の表現ではない[64]。

以上の五つの文脈から考察した後、結びの言葉が付されている。カウフマンは、様々な文脈の諸次元が相互に関連し合い、そしてそれぞれの仕方で、「論題と手紙の送付によって始まった贖宥論争が宗教改革のはじまりとなったこと」に対する要因となったと述べる[65]。しかし、同時に、この「宗教改革のはじまり」の「本当のはじまり」は、以上に述べられてきた論題公表の文脈化の試みから独特な仕方で取り出されると指摘する。

> はじまりのはじまりは、嘘を嘘として暴露し、認識された真理のために、起こり得る帰結を省みず、それ自身のために立ち上がる勇気と自由をルターに与えた良心の活動であった[66]。

以上のカウフマンのルター像、及び「95 か条の論題」公表の歴史的理解が、レッピンのものとかなり異なっていることは明らかである。レッピンの場合、すでに見たように、1517 年 10 月 31 日に群衆の前で論題を掲示するような示威的な出来事は起こらなかったし、すべてはとても慎重に始められ、神秘主義との連続性が強調されるルターの自由の理解も、その後に起こる彼自身も予期せぬ大きな出来事の前で、それ自身が内包する力は極力控え目に評価されている印象がある。カウフマンもまた、10 月 31 日の時点で、それ以降の出来事は予測不能であったことは認めている。しかし、そのことと、ルターが時代の多様な文脈の中で、極めて自覚的に、しかも断固たる態度で行動していたことを明確に区別している。そして、ルターの内的自由の経験に基づく、上述した行為の総体が「宗教改革のはじまり」に対する決定的な意義を持っていることが強調されている。「宗教改革のはじまり」を告げたのは、ヴィッテンベルク城教会の扉に響いたハンマーが釘を打つ音ではなく、一人の修道士の「良心の震動」とでも言えようか。1517 年 10 月 31 日のルターのハンマーは、単純に否定されるのではなく、「良心の働き」として再解釈されている。

---

63　Kaufmann, op.cit., S.184.『ルター著作選集』教文館、2012 年、18 頁。
64　Kaufmann, ibid.
65　Kaufmann, ibid.
66　Kaufmann, ibid.

## Ⅲ．おわりに

20世紀の宗教改革100年祭と21世紀の100年祭の間で、記念の出発点となる1517年10月31日のルターの言葉と行為の解釈をめぐる批判的な議論が生じ、それがルター伝や宗教改革史の叙述に大きな影響を与えてきた。本稿では、その変化の軌跡と最新の叙述を部分的にではあるが概観することを試みた。この議論を通じて、史実に基づく「95か条の論題」の公表に関して、ルターが、巷に宣伝された贖宥教説及びその実践を、それらを管轄する教会機関の責任者に手紙で訴えたことが、宗教改革の歴史にとって決定的な行為となったことがより明確になった。しかし、それ自身が「ジャーナリズム的地震を引き起こした」のか（レッピン）、それとも、1518年にドイツ語で著した贖宥批判のパンフレットによるのか（カウフマン）、あるいは、「95か条の論題」の爆発力の源泉は神秘主義に根差す自由の認識なのか（レッピン）、それともルター的義認教説とそれに裏打ちされた良心の自由の活動なのか（カウフマン）、その詳細をめぐる議論はまだ尽きていない。少なくとも言えることは、宗教改革600年記念に向けた100年は、20世紀までの教派的文化によって固定化されてきた神話的ルター像からさらに自由にされ、引き続き歴史的批判的な視点からルターと宗教改革に迫り、その世界史的意義を再解釈、再確認、再発見していく、未来に開かれた時となるということである。そのような研究が提供する土台を基盤として、他教派との対話と協働というエキュメニカルな時代も未来に向けて開かれていくことになるだろう。

【Abstract】

# Eine Betrachtung über 95 Thesen in den Darstellungen der Biographie Luthers und der Reformationsgeschichte, unter besonderer Berücksichtigung der Diskussion in Deutschland seit Beginn des 20. Jahrhunderts

KOTABE Shinichi

Der traditionellen Darstellung gemäß nagelte Luther die 95 Thesen am 31. Oktober 1517 mit lauten Hammerschlägen an die Tür der Schlosskirche zu Wittenberg. Dieses Bild wurde zum Symbol der Reformation insgesamt. Der katholische Lutherforscher Erwin Iserloh behauptete indes in seinem Vortrag von 1961, dass der Thesenanschlag eine Legende sei. In der vorliegenden Abhandlung wird ein Überblick über die Darstellungen der 95 Thesen in den Lutherbiographien Heinrich Boemers (1925), Roland Baintons (1950), Gerhard Ritters (1962) und Richard Friedenthals (1967) bis hin zu neueren Darstellungen Thomas Kaufmanns (2006/2012) sowie Volker Leppins (2006/2017) gegeben. Einig ist man sich heute darin, dass Luther am 31. Oktober 1517 einen Brief mit 95 Thesen an seinen Vorgesetzten, Erzbischof Albrecht von Brandenburg, sandte und dass dieser Schritt die historisch wichtigste Wirkung der Thesen hervorrief. Aber zur Frage nach der eigentlichen Sprengkraft der 95 Thesen gibt es noch immer verschiedene Meinungen. Leppin findet sie in den mittelalterlich-mystischen Wurzeln Luthers, Kaufmann betont dagegen den Zusammenhang mit der Luther‘schen Rechtfertigungslehre und der daraus folgenden „Regung des Gewissens“ bei Luther. Was der eigentliche Inhalt der Hammerschläge Luthers war, muss im nächsten Jahrhundert weiter offen diskutiert werden.